

『号外』に驚異せよ

—国木田独歩と  
戦争ジャーナリズム—

荒木優太

## 一、『号外』評価の政治的力学

国木田独歩の短篇小説『号外』は明治三九（1906）年、『新古文林』八月号にて発表された。明治三七年から始まった日露戦争は明治三八年の九月五日、ポーツマス条約締結によって終結した。このテキストは、戦争が終わり平和が訪れたものの、同時にその緊張感（「張合」）の剥奪によって反動的に形成された日常生活の虚しさを、無為徒食の知識人、加藤男爵というユニークな登場人物に託したテキストだ。先行研究を総合的に鑑みると、決して評価の低いテキストとはいえ、実際それを反映するかのよう、国木田独歩集制作の折には高い頻度で所収されている（註一）。

しかし、にも関わらず、私見によればこのテキストの重要性は正統に評価されていないように思われる。その最大の理由は、一時期以降の研究が結果的に一個のバイアスを共有した上で進行したからだ。同時代的にも評価の悪くなかったこのテキストを（註二）、研究史上で最も高く評価したのは、坂本浩『国木田独歩』（第八章、有精堂出版、昭四四・六）だ。独歩の日露戦争時周辺の作の中で『号外』を「最高の作品」と呼ぶ坂本は、心躍るかつての戦争状態を求める加藤男爵に「世の所謂敗残者の姿の中に見られる真実な叫び」を読み取って「俗習紛々たる生活や、名利に汲々たる世間」から超俗したいという独歩の願いの投影を読み取っている。しかし、間接的にであれ、まるで戦争を肯定するようなこの評は、その形のままで受け継がれることはなかった。以降の研究を通時的にみたとき、そこには研究の政治的力学と呼ぶべきようなものが生起していたように見える。即ち、国木田独歩は戦争を肯定するような作家ではない、戦争は単なる時事的な偶然の題材に過ぎない、といった（とりわけ第二次大戦以後の）民主主義的な道德観に最適化された独歩読解である。

具体的にみてみよう。典型的なのは山田博光だ（註三）。山田は『号外』が「日露戦争後の知識人の内面を描いたすぐれた短篇である」ことを認める。しかし、坂本にあった無用心は山田にはない。というのも、山田は慎重かつ巧妙に、「一見好戦主義者のように見えるけれども、本当に望んでいるのは、生きる張り合いであり、挙国一致の緊張感である」だとか、「独歩は加藤男爵の姿を一方向的に肯定しているわけではない」といった文句を挟むことで、独歩が戦争待望論者であるかのような読解を暗示的に戒めようとしているからだ。山田がいうには、「戦争を待望することは、ヒューマンイズムの立場から許せないことを、独歩は充分知った上で」「生きるはりあいを求める心情に共感」している。独歩と戦争待望論者の知識人とは別人である、と、その分割を強調することで、背面で独歩の（もっていたとされる）民主的平和的性格を示す。独歩を好戦の誤読から救おうとしているのだ。

鈴木秀子が行ったのは、独歩文学の個人的なテーマ性を強調することで、戦争を単なる時事的な題材と見なすような読解だ（註四）。つまり、戦争以外でも独歩は同じテーマで小説を書いており、それ故に、戦争そのものを主題化する必要はない、という訳だ。独歩には（具体的には後述するが）作家デビュー以前から抱いていた「驚きたい」という「驚異」のテーマが存在し、例えばそれは『牛肉と馬鈴薯』のような名短編として結晶化されていた。それ故、鈴木は坂本を半ば批判する形で「単に日露戦争後の社会状況に托して、独歩の生涯を貫いた心情を吐露した作品であるといえよう」と指摘する。だから「独歩は戦争がよいと云っているのではない」ということになる。鈴木にとって山田が行ったような分割は自明のものである。

或いは北野昭彦もまた、鈴木と同じような手法で好戦の誤読から救い出そうとしていた（註五）。北野の場合は「驚異」ではなく、独歩が抱き続けていた「個人感」と「社会感」の相克であり、つまりは社会問題（戦争）と個人的問題（「張合」）の矛盾の構図を、独歩固有の文学的テーマとして解釈しようとしている。しかし、論者は正に問題となっている相克そのものを（独歩の）「個人感」に押しこめること、言い換えれば、戦争を扱った『号外』を脱政治化しようとする政治的読解に気づいていない。

このように『号外』のもつ好戦的性格は、論者によって読解された作者の真の意図なるものによって否定されるか、或いは、独歩文学のテーマ性によって単に偶然的なものとなされる。本稿はここに疑義を呈する。しかし、ここで一旦強調しておかなければならないことは、上記のような研究の傾向性があったとして、それが間違っており、本当は独歩は戦争を望んでいたのだ、と本稿が主張したいのではない、ということだ。独歩自身が好戦的であったかどうか（独歩自身が戦後民主主義的な道德観に適合的な作家だったかどうか）、これを本稿は問わない。注目するのは、ただ、研究史によってデリケートに分割されていた独歩と戦争、その問題を、分割せずに総合的に問うことで初めて獲得できるだろう、期待的な知見である。

とりわけ、伝記的なことを記せば、国木田独歩は二度の戦争に深くコミットした作家であったことは想起されねばならない。第一は、日清戦争において従軍記者として日本海軍の戦艦に乗り込み、そのレポートを本土へ送っていた。これがきっかけとなって、矯風会の幹事である佐々城豊寿の娘の信子と知り合い、恋愛、結婚、離婚の波乱な情事を経験し、彼の文学テクストに多大な影響を与えた。そして、第二が正に日露戦争時のことで、当時独歩は矢野龍溪の引き継ぎとして『近事画報』の編集長に就いていたが、戦争が実際に始まると雑誌名を『戦時画報』と改題し、戦況をいち早く報道する戦時用メディアを作り、時局に合ったメディア戦略と従軍記者時代に得た知見の活用によって成功を収めたのだ。つまり、二度の戦争に独歩はジャーナリズムの立場から深く介入していたのだ。たとえ、戦争への関与が偶然的であっても、その影響を看過することはできない。とりわけ、戦況の「号外」をいつも肌身離さず持ち歩いている男が登場するテクスト、即ち『号外』と独歩の生身の体験が無関係であるとは考えにくい。『号外』読解において、戦争ジャーナリストとしての独歩像を考慮しないことは不自然だ（註六）。

以降、本稿は戦争とジャーナリズム、とりわけ戦争時の号外の歴史から見えてくる、『号外』世界を手がかりにし、それを前提にした上で、先行研究と同じく独歩の他のテクストとの連関や、独歩終生のテーマであった「驚異」の願望の考察に移る。前提となるこの手続きを経ることによって、新たな文脈の下、『号外』の正統的な評価——結論を先取りしていえば独歩の驚異願望の新たな展開とそこから獲られる「習慣」の問いの欠落——を期待できる。

## 二、「挙国一致」と報道の条件

今一度、『号外』がどのような話だったか整理しておこう。冒頭は加藤が東京渋谷にある大衆酒場の正宗ホールに現れる処から始まる。「キじるし」(キチガイのキ)があると噂されている加藤は「戦争が無いと生きて居る張合がない」「何とか戦争を初める工夫はない者か知ら」と、過ぎ去った戦争の再来を待望する。労働する必要なく無為に日々を過ごせる加藤にとって戦争は格好の娯楽であり、それ以外に熱中できる事件はない。彼の仲間でもある語り手に言わせれば「生活の対手、もしくはまと、或は生活の煽動者を失った」のだ。仲間からの異論反論を受けながら、話の都合上、自身の肖像の題名を考えることになった彼は、咄嗟に「号外といふ題だ。号外、号外！ 号外に限る、僕の生命は号外に在る。僕自身が号外である」と訴える。加藤は戦争に関する「幾多の新聞の号外」をポケットに入れて、常に肌身離さず持ち運んでいたのだ。加藤は手にした号外を朗読し、仲間たちから嘲笑されるが、ホールを出た語り手は「戦争でなく、外に何か、戦争の時のやうな心持に万人がなつて暮す方法は無いものか知らんと考へ」る。そこで小説は終わる。

一読して、最も興味深いのは古い号外を常に持ち運ぶというパロディカルな人物設定だ。号外の歴史を研究する小林宗之(註七)は、号外の第一の役割を「速報性」に求めている。号外とは号(ナンバー)の外で出される出版物の謂であり、規則性や習慣性(日刊、週刊、月刊)を破る形で急ごしらえで出版される。だから号外は「詳報」ではない。内容よりもスピードが重視され、そのため、突発した重大ニュースの事実を伝達することのみに特化したメディアとして機能する。

そうだとすれば、古い号外を、しかも絶えず持ち歩く、という登場人物は号外の第一の特性を裏切ってしまうだろう。「速報性」に特化したメディアは、時間が経ち古くなれば、何の用もなさない。小林は号外のもう一つの役割に「本紙の部数増加につなげる、読者獲得のための手段」という呼び水の性格を考えているが、実際、本紙である新聞や雑誌といった規則的メディアの方が「詳報」性に優れていることは疑えない。速報性を喪失し詳報性もない古い号外は普通に考えて塵芥以外の何物でもない。加えて、それ故に、号外は保存の対象となることもない。小林は号外がバックナンバーにも登録されておらず、国会図書館の納本制度の対象にもなっていないことから来る号外研究の困難を記述しているが、その事態が示しているのは、号外が、保存されて何時でも閲覧可能にすべき資料ではなく、読み捨てのテンポラリーなメディアと見なされてきた社会通念である。「詳報」機能を本紙に譲っているのだから、この通念は当然であるが、だとすれば加藤男爵の一連の行動はその通念を裏切る奇異なものといわざるをえない。

古い号外を持ち歩く登場人物、それが「キじるし」が示している特徴の一つかもしれないが、その行為はパロクスそのものと言って過言ではない。彼が後生大事に抱えているのは、もう既に過ぎ去ってしまっている一事件を雑にスケッチした無益な紙屑だ。しかし、この点に小説の肝がある。何故、加藤は過去の号外に執着し続けるのだろうか。一応、その答えは出ている。つまり、戦争だけが彼の生活に刺激と興奮を与えていたからだ。しかしでは何故、戦争は刺激と興奮を提供しえたのだろうか。語り手は次のように分析している。

「露西亜征伐」に於て初て彼は生活の意味を得た。と言はんよりも寧ろ、国家の大難に当りて、これを挙国一致で喜憂する事に於て其生活の題目を得た。ポーツマウス以後、それが無くなつた。／彼れ男爵、たゞ酒を飲み、白眼にして世上を見て ばかり 居た加藤の御前は、がっかり して了つた。世上の人は悉く、彼等自身の問題に走り、そが為めに喜憂すること、戦争以前のそのの如くに立ち返つた。けれども、男は喜憂の目的物を失なつた。即ち生活の対手、もしくは まと、或は生活の煽動者を失なつた」(『号外』)

語り手に言わせれば、加藤の「目的物」の内実は、「世上」に於ける「挙国一致」という国民的一体感の生起に関係している。ここにおいて個人主義的な利害関心は揚棄される。そうでなくては、戦後「彼等自

身の問題に走」ることに加藤が「がっかり」するはずがない。しかしこのことは、語り手も同感しており、小説末尾には「三十七年から八年の中頃までは、通りがりの赤の他人にさへ言葉をかけて見たいやうであつたのが、今では亦た以前の赤の他人同志の往来になつて了つた」と、銀座の街路での観察を語っている。こうして「戦争の時のやうな心持に万人がなつて暮す方法」が最後に思案される。

「赤の他人」を克服することで成立する「拳国一致」。この感覚の根本的な原因には、やはり「号外」に象徴される戦争ジャーナリズムの激化という歴史的背景を考えないわけにはいかない。そもそも、日露戦争はメディアが戦争の是非を公に議論した初めての戦争だった（註八）。非戦論の『東京日日新聞』、『毎日新聞』、『二六新報』、そして主戦論の『東京朝日』、『大阪朝日』、『国民新聞』などが自説を展開するなか、元は非戦論だった『萬朝報』（社主、黒岩涙香）が時局に屈し主戦論へ転向すると、社に属していた内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦らは退社し、幸徳と堺は非戦論を貫くために『平民新聞』を立ち上げた。このような活発な言論状況のなかで、戦況の変化に注目が集まらないはずはなかった。そこで活躍したのが号外である。実際、日露戦争は新聞紙史上もっとも苛烈な号外競争を引き起こした社会的関心事だった。競うようにして各社が従軍記者を戦場に送り、号外の発行回数も歴史上、桁違いに多い。加藤が日露戦争の「号外」に特別思い入れがあるは、その意味で肯ける。日露戦争は正に「号外」を最も効果的に機能させ、その威力を顕示させた戦争だったのだ。

前線と銃後をタイムラグなく繋ごうとするこのような速報メディアの多用は、リアルタイムの戦況に対して擬似的に同期する国民の存在を準備している。しかも「号外」は基本的には無償配布であり、情報は平等に遍く分配され、国民の金銭的格差はそこでは覆い隠される。或いは別に、ある論者は日露戦の報道の「語り」に着目し、その特徴の一つに「爆発」「沈没」などの、「点」的な決定的瞬間を捉える「語り」方（これは号外にもしばしば散見できる）を数えているが（註九）、このような手法もリアルタイム感の演出に寄与するだろう。かくのごとき報道の技術的条件によって「一致」感は準備されるのだ。

### 三、従軍記者／編集長としての独歩

こういった報道の技術的条件に対し加藤は無反省的であるように見える。「一致」感は本当の「一致」と共に生起するとは限らない。報道の条件さえ整えば、「一致」の場面に臨場せずとも、ナショナリスティックな心性を加熱させることは可能なはずだ。そして、「何事も為して居ない」ために世界が狭いだろう銃後の男爵が、国民一人一人の心性の変化や戦場の具体的状況に精通していたかどうかは疑問だ。加藤にとって戦場とは想像の戦場であり、報道メディアの媒介を経て活性化されたイマジナリーな対象である。しかし、彼はこれに気づかない。もし気づいていれば、彼のナショナリズムは沈静化してしまっただろうからだ。ある意味、男爵はメディアに踊らされている。

しかし、加藤を描いた国木田独歩には別様の考察を用意せねばならない。それは、前述したように、独歩にとって戦場は仕事場の一部を成していたからだ。

順にみていこう。まず初めに、独歩は明治二七～二八（1894～1895）年の日清戦争において、海軍従軍記者として戦地に赴いている。徳富蘇峰の力で国民新聞社に入社した独歩（国木田哲夫）は、軍艦千代田に乗船し、約五ヶ月のあいだ海戦を実見、そのレポートを本社に送っていた。それは『国民新聞』紙上で発表され、後に独歩の死後、『愛弟通信』（明四一、佐久良書房）としてまとめられた。題名の由来は国に残してきた弟の収二へ呼びかける、「愛弟」の語が頻出するところから出版社が決定した。この元となった連載が読者に評価され、無名だった独歩の名声は飛躍的に高まった。

興味深いのは、戦争を異にしているものの、元々独歩は加藤男爵のような報道の条件に拘束される国民読者に「一致」の材料を送っていた側に立っていたということだ。独歩が書いていたのは、勿論、号外ではないが、しかし山田博光が前述の研究書の『『愛弟通信』とその周囲』の中で、『号外』も引き合いにしながら指摘するように、そこには既に「一致」を煽るような調子が（報道の条件云々ではなく）実際の文章の上で採用されていた。年少士官の戦死に対しては「嗚呼皇天！ 吾等国民をして願くは彼等の熱血を重ぜしめよ」（「年少士官」）と願い、天長節では「我が大日本帝国の国民は、諸君の如き忠勇なる軍人を有するを誇る！ 諸君亦常に記憶せよ。諸君の頭上、英聖文武なる皇帝陛下あり。諸君の後、熱情燃ゆるが如き四千万の同胞あり」（「艦上の天長節」）といきり立ち、外国人に追従しない「勇敢なる日本人」の挿話で国民のナショナリズムを刺激する。独歩は元々加藤のような読者を踊らせる側の書き手だったのだ。それは独歩が『愛弟通信』の題名を「海上砲煙」や「艦隊戦列」など、ナショナリズムに訴えた「売れさうな名」を付けたがっていたことから伺える（註一〇）。

この立場は、日露戦争においても基本的に継続していたといえる。今回は従軍しなかったものの、独歩は『戦時画報』の編集長として戦争報道を指揮したのだ。独歩は自身が担当していた雑誌について殆ど語らず、編集者独歩を知れる直接的な資料は少ない。しかし矢野龍溪は送られてきた戦場のスケッチや原稿の編集、印刷部数や増刊の決定など、ほとんどの業務を独歩が仕切っていたと回想しており、独歩の主体性の発揮は間接的に伺い知ることができる（註一一）。紅野謙介は「雑誌全体が独歩のカラージュした作品」ださえ評価している（註一二）。とりわけ、独歩の才覚が働いたのは、他誌に比べ絵や写真や漫画が多く、ビジュアルに富み、視覚的に訴える誌面作りに励んでいたという点だ（註一三）。

それは『戦時画報』の注意書きや社告に露骨に現れている。改題第一号（明三七・二）の注意書きでは、雑誌の名目として「戦は生まれり、詳報は頻りに至る。国民は欣喜踊躍せり、上下挙つて此の活画を得ん」という欲望に応える点を明らかにして、その隣り頁の社告には「日露交戦の画報として天下独歩なるべき」の抱負が語られている。大文字化された「天下独歩」に独歩のさり気ない自己主張が紛れているかもしれないが、依然注目すべきは『戦時画報』が「活画」の欲望に応えるメディアだったということだ。

少し号が進んだ同年八月号以降になると、「投寄」（投稿）呼びかけが注意書きされている。「外征の辛苦と、其の戦功とを写出して、国人に目撃せしめ之をして感奮興起せしむる」任務を全うするため、「誰人にも、其の図画を寄稿せらんことを望む」。しかし、そこに特別な資格は必要ない。その画は「略図」でも良く、それを社にて「本図」に書き換え掲載する。「素人の画にても構」わず、「ほんのスケッチ」「画と名づけ難きほどの粗図」でも良い。というのも戦場のことならば「何にても注意すれば、画とならざるもの無し」であるからだ。唯一、最低条件として日付場所を明示することだけが提示される。それは「本誌の画図はなるべき写実を主とするが故に、年月日地名等の確実を要する」からだ。ここには戦地を漏れなくしかも的確に視覚化しようとする意志が垣間見れる。同年九月号には、「一切漏れ無く其実況を写出」するために、部署移動がなされたことが報告されている。そして、一連の努力が実ってか、いち早く画家と写真家を戦地へ派遣した『戦時画報』は、驚くべき売れ行きを見せ、近事画報社は社の黄金期を迎えた。

成功の因子の一つにもなっただろう、独歩の従軍記者経験はどんな形で活かされたのだろうか。この部分は推測になるが、やはりその視覚性の強化に注目していいだろう。というのも、独歩の『愛弟通信』には視覚性の欠如による困難が処々で露出してくるからだ。例えば、戦況を伝えるのに珍しく地図を使う際、独歩は「凡て地図を以て説明する程、殺風景なるものはなし。風景を殺すとは実に此事なり。去りとて美術家ならねば、画を以てすることも出来ず。止むを得ず左に大連湾の図を描き、其の真光景に至りては、御身の想像にまかす」（「大連湾進撃」と、その視覚的情報の伝達不足に不満を訴えている。このような経験が、後年、画家や写真家の派遣決定につながったと考えることは決して突飛なことではあるまい。

或いは、それ以上に決定的なのは、独歩が従軍記者時代に実際「戦ひに死したる人」を目撃したということだ（「旅順陥落後の我戦隊」）。海岸近くの荒野で倒れた三四、五歳の中国の兵士を見て、独歩は次のように感じている。

『戦』といふ文字、〔中略〕此の不思議なる文字は、今の今まで吾に在りて只だ一個聞きなれ、言ひ慣れ、読み慣れたる死文字に過ぎざりしが、此の死体を見るに及びて、忽然として生ける、意味ある文字となり、一種口にも言い難き秘密を吾に私語きはじめぬ」（『愛弟通信』）

ここでは視覚情報によって露わになった文字メディアの限界が意識されている。視覚性が追加されることで、単なる文字も「生ける、意味ある文字」に生まれ変わり、逆に翻ってその見地からみれば、単なる文字列は「死文字」に等しかった。それ故に、引用部に続く言葉を借りれば「素読したる軍記、歴史、小説、詩歌さへも、此の惨たる荒野に仆るゝ戦死者を見るに及びて、始めて更らに活ける想像を吾に与え」ることになった。つまり、視覚情報がメッセージの効果を倍増させることを独歩は戦地で学んでいたのだ。この経験が活かされることで、実見と被媒介という違いはあれど、できるだけ記者が感じた感動を読者もそのまま共有しようとする目的の下、ビジュアル重視の誌面構成の方向性を編集長独歩に与えた可能性は捨て切れない。

独歩が手がけた出版事業は、戦争が終わると共に衰退してしまい、矢野龍溪の決断で近事画報社は解散した。独歩は近事画報社を引き継ぐ形で出版業である独歩社を立ち上げるが、この事業は経営難に陥り、明治四〇年四月に破産、そして肺病にかかった編集長は明治四一年の六月に没する。『号外』が書かれ、発表されたのは、丁度独歩社を立ち上げる頃のことだが、最後まで出版に関わり続けた孤高の作家が、出版編集の仕事で最も好評を得た戦争ジャーナリズムの機会を再び望み、それが間接的に「何とか戦争を初める工夫はない者か知ら」といった言葉を準備させたのだと考えることは全く不思議ではない。独歩は戦争を伝えることで、自身の主要な経歴を形作ってきたのだ。勿論それが独歩の好戦性を証明しているというわけではない。しかし、先行研究のように戦争と独歩を余りに敏感に分割することは視点の総合性を欠く帰結をもたらすことは確かだ。

#### 四、『牛肉と馬鈴薯』と驚異の願望

いずれにせよ、独歩は号外のような事実のみを伝える淡白な速報ではなく、視覚的情報を盛り込んだ詳報の編集長を務めていた。そしてそこには連続性があるように見える。従軍記者から編集長へ、新聞からグラフ雑誌へ、二つの戦争報道の成果は、より臨場感を再現しようとする出版者としての成長を示唆している。しかし、そのような経歴をもった書き手が日露戦後、『号外』の加藤のような登場人物を設定することになったことは、普通に考えて極めて奇異なことだといわざるをえない。必要以上に号外に固執する読者は、ある意味、新聞記事であれ、グラフ雑誌であれ、自身がこなしてきた仕事を否定するような存在である。「号外」読者にとって報道の速度だけが特権化され、戦場記者がどのような風景を目撃したか、その仔細は問題にならないからだ。特に加藤が重視しているのは「拳国一致」、「赤の他人」の克服状況であって、そのための種になれるのなら前線の報道の正確さや密度がどうであれ、構う必要はない。

しかし単なる興味本位でそのような読者像を独歩が造形したのではないことは明らかだ。というのも。そのような例外的な読者に、独歩は長年抱いてきた自分固有の思想を仮託してもいるからだ。即ち、驚異の願望がそれに当たる。

驚異願望は作家になる以前、初期から最期まで続く、国木田独歩の本質的なテーマだ。「シンセリティー」「個人感」「天地生存の感」など、隣接し相関するテーマ系の研究は既に前述の北野昭彦などが日記『欺かざるの記』の記述を中心に行っているが、驚異願望を小説として最も的確に、代表的に表現しているのが、『号外』から遡ること四年前の、『牛肉と馬鈴薯』（『小天地』明三四・一一）に於いてだ。これに続く形で驚異願望は『悪魔』（『文芸界』明三六・五）や『岡本の手帳』（『中央公論』明三九・六）などの文学テキストで表現されていったことはよく指摘される。

『牛肉と馬鈴薯』は芝区桜田本郷町にある明治倶楽部で行われている宴に、主人の友人である（どうやら文筆家らしい）岡本誠夫が現れ、場でなされていた現実（馬鈴薯）と理想（牛肉）の相克の議論をきっかけに、彼の「驚きたい」という不思議な願望が語られていく筋の小説だ。甘い恋愛の夢想、政治的成功、聖人君子への憧れなど、願いの本質を次々と否定していった彼は、「吃驚したいというのが僕の願なんです」、「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願」、「如何にかして此古び果てた習慣〔ルビ、カスタム〕の圧力から脱がれて、驚異の念を以て此宇宙に俯仰介立したいのです」と断言する。

『号外』が『牛肉と馬鈴薯』の驚異の思想を受け継ぐテキストであることは既に先行研究で触れられている（前述した北野や鈴木秀子の研究がそうだ）。加えて、この二作の連関が強いことは独歩自身の述懐でも見ることができる。つまり、晩年に口述筆記された『病牀録』（明四一・七）で、独歩は「一気にして成れるもの」、つまり一晩のうちに書き上げた即興的テキストとして、『号外』と『牛肉と馬鈴薯』の名を挙げているのだ。前者は酒の力を借りて、後者は「神来」が到来して、という違いはあれど、この二作を並べることは独歩の意図にも背くものではない。

では、ここで言われる驚異とは如何なる事態を指しているのだろうか。『牛肉と馬鈴薯』において「驚異」概念の対をなしているのが既に示した「習慣」という概念だ。岡本は次のようにも述べていた。

「僕等は生れて此天地の間に来る、無我無心の小児の時から種々な事に出遇ふ、毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙万般の現象も尋常茶番となつて了ふ。哲学で候心の科学で御座ると言つて、自分は天地の外に立て居るかの態度を以て此宇宙を取扱ふ」（『牛肉と馬鈴薯』）

「習慣」は凡ゆるものを「尋常茶番」にしてしまう。逆に言えば、「習慣」がなければ、宇宙に於けるあ



らゆる現象や出会い、生のどんな一齣、そもそも自身がこの宇宙に生まれ落ちた出来事も「不思議」や「驚異」の対象となる。「習慣」が生み出す慣れ親しみが出来事への畏敬の念を削ぎ、「天地の間」で生まれたにも関わらず、その外、つまり「天地の外に立っているかの態度」をもって宇宙に対峙してしまう。宇宙は疎外され、一個の対象物となるのだ。それ故に、「驚異」を取り戻すには「習慣」化される以前の、子供のときのような「無我無心」が必要となる。

『牛肉と馬鈴薯』が、数年後の『号外』に小説の基本的枠組みを提供していることは明らかだ。共に討論形式で物語が進んでいくのも共通しているが、どちらの登場人物も日々の日常に飽き果てており、その日々を何とかして新鮮な気持ちで生き直したいと願っている。『牛肉と馬鈴薯』ではその問題設定が、「驚異」とそれを邪魔する「習慣」の対立図式として、一種抽象的な形で提示されていた。『号外』では、この対立が無為な日常とその日常を破る「戦争」への希求に重ね合わされている。「号外」とは不意に到来し、(国民的)日常を沸き立て習慣を破る、驚異の具象化だ。『牛肉と馬鈴薯』が純粹に独歩の思想を汲み上げた理論的小説であるならば、『号外』は時事をふんだんに取り込んで思想を具体化した応用的小説と呼べるだろうが、どちらも驚異の願いに貫かれていることに変わりない。

## 五、驚異としてのテキスト

『号外』が興味深いのは、数年前は抽象的にしか驚異思想を示せなかった独歩が、より具体的に驚異の現実を具体化させ、一步前進して提示している処にある。実際、『牛肉と馬鈴薯』ではその抽象性から、その願いの困難を先取りしてか、「吃驚したいと言うけれど、矢張り単にそう言うだけ」と最終的に岡本は願望をはぐらかせてしまう。それを言った本人の顔には「苦痛の色」がある。驚異は容易には到来しない。『号外』が実験的に試みているのは、より身近に体感できる驚異の可能性の途だ。

先ず号外は、号（ナンバー）の外部に存在することに注目していい。数字（数学）批判を独歩が繰り返していたことは拙稿「国木田独歩、運命の場所」(<http://p.booklog.jp/book/72257/read>)に書いたが、独歩にとって宇宙の神秘的宗教的な永遠性は数字の連続によって捉えられない。それ故、『号外』はナンバーから外れるものとしての「号外」にその神秘性を託した、ナンバー批判の小説の系譜に連なるものだと評価できる。加えて、号外 extra とは extraordinary（普通から外れてる）の省略である。加藤が「僕自身が号外である」と叫ぶ時、「驚異の念を以てこの宇宙に俯仰介立したい」という岡本の願いが間接的に叶えられている。「習慣」克服の具体例が示されているのだ。だから『号外』とは『牛肉と馬鈴薯』の実験的具體化のテキストだといえる。

しかし、その実験性は単にテキストのテーマのみに留まっていない。というのも、『号外』の「号外」性は、何より、記者と編集者を経た作家独歩にとって、とりわけ発揮されるだろうからだ。加藤男爵とは独歩が意図的に主として相手にしてきた読者とは異例な存在であり、自身の努力をすべて無為にしてしまうような例外的な存在者だ。つまり、加藤の存在が「号外」だったとして、その号外的驚異性を最も効果的に感じれるのは、当の登場人物を造形した独歩自身であるはずなのだ。古くなった号外を持ち歩くパラドシカルで懐古的な読者を冒険的に創作することによって、独歩自身にとっての「号外」を（自己）形成する。その意味で、『号外』とは驚異の願いを創作活動そのものを通じて実践するメタ効果を産出していると考えることができる。つまり、「僕自身が号外である」という訴えは（作中と作者において）二重化されているのだ。

ナンバーの外とは、類例の外部、意図の外部でもあったのではないか。『号外』というテキストは、独歩自身にとって、例「外」的・意「外」的な対象そのものだった。このようにテキストを捉えたとき、『号外』に流れる日露戦争の文脈を低く見積もり、独歩の純粋な思想のみを取り出すような評価の枠組みには疑問が付される。『号外』において造形された登場人物は、独歩がこなしてきた戦争ジャーナリズムの経歴の延長線上で見たとき、独歩文学において特別な価値を帯びていると見做せる。そして、その部分を捨象することは、驚異思想の展開を極めて限定的に処理してしまいかねない。『号外』は『牛肉と馬鈴薯』の驚異を具現化させている稀有なテキストだ。実際、このテキストは即興的に書かれることで、特に独歩のことをよく知っていればいるほど、「驚き」を喚起しうる小説に仕上がっている。『病牀録』での記述を引こう。「『号外』は殆ど一気筆を呵して成れり。自分の雑誌に自分の作品を出さゞるは不親切なりとの編集者の詰責に己むなく一晚にて書きなぐれり。盛夏の頃、蚊帳の中に机を持ち込み、家族をすべて退け、片手に盃を持ちながら酒に乗じて書きぬ。即ち酔人が酔人を描けるなり。花袋君は其作風の全く常に似ざるに驚きて、独歩は邪路に入れりと言ひしと聞く。無理もなき事なりと自らも思へり」（『病牀録』）

『号外』の特徴は、大して推敲もせず、酔いに任せて一気呵成に書き上げた処にある、と本人が述懐している。重要なのは、特徴として導き出された酩酊的即興性が、普段の作風から外れた調子を生み、それが一時期共同生活もしていた友人の田山花袋に「驚き」を喚起させたらしいという自覚だ。『号外』は『牛肉と馬鈴薯』の思想を実際に実践している。つまり、結果的にいえば、独歩は自分の作風、そして何より自分自身が相手取っていた読者像から完全に切り離された、自他共に想定外のドラマを創作することに成功

しているのだ。言い換えれば、「自分の雑誌に自分の作品」を載せる通例に対抗して、正に「全く常に似ざる」(extraordinary)を実践せんがために、凝り固まった自己イメージの外へ出ることに成功しているのだ。『号外』というテキストは、オブジェクト(小説内)・レヴェルでもメタ(小説家)・レヴェルでも、「驚異」の願いを具体的現実的に書くことを通じて叶えようとする、『牛肉と馬鈴薯』の応答作と考えることができる。テキスト『号外』は、単に号外をモチーフにした小説であると同時に、独歩の経歴と共に考えてみれば、小説自体が号外的性格を帯びているのだ。

しかし、無論『号外』に於ける驚異の実現は、それ以前に考えていた独歩の驚異願望と大きな懸隔をもっていることも確かだ。関肇は『牛肉と馬鈴薯』論の中で、徳富蘇峰や高山樗牛らと比較しながら、独歩の驚異の前提として宇宙の無限と対比された有限性(例えば死)を自覚する「吾」(自我)の成立に注目している(註一四)。「吾」はなんの必然性もなく一次的に天地の間で誕生し、やがてやはり何の必然性もなく死んでいく。代表的な日記の記述を挙げてみれば「吾は二度と此の世界に生れ来る者に非らず、吾の此の世界に存在せることは、唯だ一個の真なる事実なりて心思想感情を固く持ちたし」(明二六・四・三)ということになるが、この一回性の意識に還っていくことに驚異の本質がある。

それに比べれば、ナンバーの外=号外として無限の世界を一瞬仮構し、驚異を喚起さすことに成功したとしても、「最早戦争は止んちやつた、古い号外を読むと、何だか急に歳をとつて了つて、生涯がお終結になったやうな気がする」と、すぐに習慣に回収されてしまう加藤の驚異は純粋な驚異とは呼べない。同じ驚異は何度も反復されると、耐性がついてその効果が薄れていき、最終的に対立していた筈の習慣そのものに変貌してしまう。そして再び驚異願望が再燃される。麻薬中毒を思わせるこの悪循環を断ち切るには、いささか抽象的な、摩滅されない驚異としての有限な「吾」の自覚が求められる。有限性への自覚は、限界が来ない限り(死なない限り)建前上は無限に可能な驚異といえる。無為徒食に暮し、生命の安全が保障された加藤にこの「吾」は生起せず、驚異は容易に習慣に汚染されてしまう。これが実験的試みで得られた一つの帰結である。

『牛肉と馬鈴薯』と『号外』を共に読んで、翻って総括的に理解できるのは、独歩は驚異をグラデーションをもって考えていたということだ。戦争にも見いだせる通俗的な驚異は不純な驚異であり、すぐに習慣にとって替えられてしまうが、その根本にはより純粋な、尽き果てることない驚異の泉(有限性を自覚する「吾」)があり、それは何度も習慣を斬新な驚異心へと巻き返す力を与えてくれる。それに比べれば、酩酊的即興性が帯びさせるメタ効果的な「驚き」もまた前者の方により近い。だからこそ、『号外』の驚異思想の具体的展開の実験は二重の意味で失敗しているといえる。

## 六、独歩のアキレス

しかし、この失敗は独歩にとって極めて重要な論点を提示してははずだ。

元々、驚異はギリシャ哲学において特権的な契機を提供していた。アリストテレスは『形而上学』のなかで、驚異すること、タウマゼインによって哲学＝愛知（フィロソフェイン）が開始されると指摘していた。驚異を感じる者は自身の無知を自覚する。その欠乏から脱却しようとする運動が哲学となる。この知見は、アリストテレスの師であったプラトンも共有していた。『テアイテトス』でのソクラテスの言葉でいえば「驚異の情こそ智を愛し求める者の情」なのだ（田中美知太郎訳、岩波文庫、昭四一・九）。そして、このプラトンの偉大さを讃えながら、驚異の念を近代で復活させようとしたのがイギリスの批評家トマス・カーライルである。

「わたくしどもは毎日無関心に眺めている日の出も、この人〔アイデアとしての太陽光を直接見ず、その影だけを洞窟で追っていたがついにアイデアを直視する、プラトンが『国家』の中で構想した寓話の人物〕がそれを見たときの驚歎 wonder、恍惚われを忘る驚愕 astonishment はいかばかりであったであろう！ 小児の自由で開放的な感受性と、しかも、成人の豊かな能力を備えているために、この光景を見て彼の心はくまなく燃え上がり、その神々しさに打たれ、彼の魂はひれ伏してこれを拝んだことであろう。ところで、まさにこの小児のような偉大さが原始民族にはあったのである。未開人にあらわれた最初の異教の思想家、すなわち、思索しはじめた最初の間人が、まさしくこのプラトンの想像した小児的成人であった」（『英雄と英雄崇拜』第一講、入江勇起男訳、日本教文社、昭三七・七、引用文中の原語挿入は引用者によるもの）

カーライルがギリシャ哲学の伝統的な考え方を受け継ぎつつ、そこに「小児」や「未開人」といった過剰な比喩を追加しているのが分かる。これが西洋近代を反転させるために持ち出されてきた広義のオリエンタリズムであることは明らかだ。しかし、それとは別に、国木田独歩の驚異思想がこのようなカーライルの言説から学んだものだったことは注意していい（註一五）。独歩は間接的にギリシャ哲学の根本的な問い、いかにして哲学は始まるのかの問いに文学の立場から取り組んでいたといえるわけだが、その中で独歩は文学的テーマとしてその困難さの源を構成する日常的な習慣性に対峙し、習慣に汚染されない純粋な驚異を探し求めた。

しかし、カーライルのオリエンタリズム的言説が垣間見せているのが、過剰に理想化された〈原初的な驚異〉なるものを無前提に持ち出し、それを自身の文化よりも未熟なもの（子供や未開人）に投影する一方的なメカニズムであるとすれば、独歩の文学的探求に対しても、その元々の問題設定を問わないわけにはいかない。子供の頃に体験した宇宙に対する不思議や驚異は果たして「習慣」と無関係のものだったのか。例外にしても意外にしても、それはいくつもの凡例や意図が平均的な値を提示した上で、初めてそこから「外」れるということが可能になる。号外＝ナンバーの外にしても同様で、それは数の連続の後に異例なものとしてのみ存在する。こう考えてみれば、習慣という内部を前提にして、それを攪乱する形でのみ驚異という外は生起するといふべきなのではないか。独歩は日記の中で「突然めざめし時、此の生命と存在と此の天地とを驚異するの恐しき力もて心を衝きたり。あゝ願ふ。常にかく驚異せんことを」（明三〇・一・一三）と書いているが、常なる驚異とは、習慣そのものといふべきなのではないか。逆にいえば、習慣とは、驚異に対立すると同時に、驚異の条件でもある。『号外』というテキストの実験性は、図らずも、初期から抱いていた独歩の驚異願望が中途半端に抽象的で、現実的には不可能な願いであるということを明示してしまっている。というのも、具体的な状況下で驚異を描こうとしても、実際には習慣の力を無視することはできず、習慣が驚異の舞台となっていることを結果的に表現してしまっているからだ。

独歩は生涯「習慣」的テーマを深掘りすることはなかった。『牛肉と馬鈴薯』の思想のエッセンスを抽出

した『岡本の手帳』では、「習慣」に相当する言葉が「世間的」(Worldly)と呼ばれており、「驚異」に比べ用語の一貫性に乏しく、明らかに焦点が驚異の方に絞られている。しかし、だからといって、単に純粹無垢な驚異の泉を対置しても願望の解決にはならない。習慣とは何か、習慣と驚異の関係は如何なるものなのか、これらの問いは、実は独歩のアキレスを形成していた。

独歩が仄聞くところによれば、友人の田山花袋は『号外』に驚異を感じた。彼は『号外』にとって最適な読者だったといえようが、それ以上に花袋は独歩のアキレスを最初期に臆けながら洞察していたかもしれない。独歩追悼文「国木田独歩論」(『早稲田文学』明四一・八)で、花袋は「常に「驚きたい」と云つて居た」友を回想しつつ、『牛肉と馬鈴薯』に「驚き難き」を嘆じ、『号外』に「号外」を欲し、『疲労』に「疲労」を描いた」として、『号外』に言及している。『牛肉と馬鈴薯』では純粹な驚異が求められ、それを通俗的に現実化しようと『号外』では戦争の題材を借りつつ驚異を仮構した。しかし花袋によれば驚異探求の営みの末に待っていたのは、『疲労』だった。掌編『疲労』(『趣味』明四〇・六)は大森亀之助が一日のうちに度重なる社交的用事によって心身共に疲れ果てていく様子を素描した小説であるが、『牛肉と馬鈴薯』『号外』『疲労』というテキストの選択と列挙順序には、驚異がたとえ生起してもすぐに摩滅して単なる疲労や習慣に墮してしまうのではないか、という驚異願望にとって根本的な批評の眼差しが生きている。

しかし、このアキレスは単に独歩文学だけに限定していい問題ではない。森鷗外『舞姫』の豊太郎、夏目漱石『それから』の代助、芥川龍之介『路上』の俊助など、日本近代文学で活躍した近代知識人的な主人公がしばしば「ニル・アドミラリ」(nil admirari)——驚異驚歎の念 admiration の欠如を意味し、冷笑的で無気力的な態度を指す——を抱えていたことを考えれば、習慣の考察は近代文学にとっても決定的に重要な問題であったはずだ。加藤は個人主義化された国民を「白眼」視していたが、ソフィスティケート(洗練)された知性が、たとえ驚異から出発していたとしても、驚異の劣化と無縁であることはできず、寧ろその洗練さ故に、西洋の物真似に終始して中途半端な近代化しか遂げなかった日本の近代生活のなかからは、特別な習慣、怠惰、退屈が喚起していくことになる。『号外』はこのように、近代文学が放置していた宿題に意図せず奇跡的に接触している稀有なテキストとして評価できるものだ。

(註一) 筑摩書房版(現代日本文学全集)、昭三一・六。講談社版(日本現代文学全集)、昭三七・三。角川書店版(日本近代文学体系)、昭四五。等々。

(註二) 徳田秋声は『号外』を読んで「すっかり感服した」と述べている、「独歩式の特長」『新潮』明四一・七。また、白雲子は『濤声』所収の『号外』を読み「篇中の白眉」と評価した、「自然派と「濤声」」、『読売新聞』明四〇・六・九。

(註三) 山田博光『国木田独歩考』「明治期の知識人の肖像」、創世記、昭五三・九。ちなみに、ここで記したような解釈を山田は角川書店版『国木田独歩集』の注釈でも指摘している。

(註四) 鈴木秀子『『号外』論』、『国文学解釈と鑑賞』平三・二。

(註五) 北野昭彦『国木田独歩の文学』第二章、桜楓社、昭四九・九。

(註六) 「こんにち、わたくしどもが独歩の作品を読む場合、そういう情況は普通あまり考えないでいる。それはそれでいいのだとも云えようが、それではあまり独歩がかわいそうな気もするし、また作品を理解するのもにも不十分なことになるのではないかと思う。その事業が成功したか失敗したかは別問題で、とにかく独歩は事業家として出版社を経営していたのである」。和田謹吾「事業家としての独歩」、『定本 国木田独歩全集』「月報」第一巻、学習研究社、昭四三・三。

(註七) 小林宗之「戦争と号外(1)——号外の誕生から日露戦争まで」、『Core ethics』、立命館大学大学院先端総合学術研究科、平二四。なお、日露戦争時の号外の実態については他に、渡辺一雄『実録号外戦線』(新聞時代社、昭三八・九)、春原昭彦『(第四手訂版)日本新聞通史』(新泉社、平一五・五)等を参照した。

(註八) 土屋礼子「日露戦争報道と〈帝国〉の民衆——百年前にみる今日的課題」、『新聞研究』平一六・七。

(註九) 加藤裕治「「逸聞」において報じられる戦争——日露戦争新聞報道における「戦死者家族訪問記」の「語り」が意味するもの」、『千葉大学社会文化科学研究』平一六・二。

(註一〇) 岡落葉宛書簡、明治三三年一二月一八日。詳しくは、紅野謙介「想像の戦争 戦場の記録——『愛弟通信』『第二軍従征日記』『大役小志』を中心に」、『日露戦争スタディーズ』収、小森陽一・成田龍一編、紀伊國屋書店、平一六・二。

(註一一) 「私はホンの黒幕であつて、近事画報一切の事業も計画も殆どあの人一人でやつたといつてもよい位でした。〔中略〕又表紙や挿絵なども小山君や満谷君などゝ相談して毎号細かく気をつけたものだ。又戦地に居る通信者がいる戦況をスケッチを送る。其れが五十も七十も来る。や、是が読者が喜び相だとか、是れが受けがよからうといふような事も一々国木田君がやる。又原稿の選択は固より、印刷部数又は臨時増刊の如き事でも大抵国木田君がやつたもので、さうしてそれがなかよく当る。若し又やり損つても人を尤めず自分も余りくよせぬ方である。又広告のやり方でも近事画報では他に率先して新機軸を出したものもあるが、それが多く国木田君の考案であつたのを見ても、あの人の中か緻密で利巧な人であつたことが分る」。矢野龍溪「近事画報社時代の独歩氏」、『中央公論』明四一・八。

(註一二) 紅野謙介『『戦時画報』』、『日本古書通信』平一六・四。

(註一三) この周辺の記述は黒岩比佐子『編集者 国木田独歩の時代』(角川学芸出版、平一〇・一二)から多く学んだ。

(註一四) 関肇「アイロニーの機制——国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論」、『光華女子大学研究紀要』平一〇・一二。

(註一五) 茅野直子「国木田独歩とカーライル」、『青山語文』、青山学院大学、昭四五・一二。

※独歩テキストの引用は『定本 国木田独歩全集』（学習研究社）を用いた。ただし旧字は新字に、傍点は傍線に変更した。引用文中の〔〕は引用者による注記であり、／は改行を示す。

（2013.08.01）

『号外』に驚異せよ——国木田独歩と戦争ジャーナリズム——  
<http://p.booklog.jp/book/74994>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/74994>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/74994>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ